

韓式系土器についての予察

植 野 浩 三*

Preliminary report on Korean peninsula style pottery
called Kanshikikei-Doki, excavated in Japan.

Koso UENO

はじめに

わが国の原始・古代史において、海外との文化交流を示す遺物には様々なものがある。これらの渡来系遺物の出土は、古くは縄文時代に遡り、弥生時代、古墳時代と時代を下ることにその頻度を増してくる。遺物の主なものとしては、青銅器、鉄器、石器、土器等あらゆるものを包括するが、遺跡における様相もこれに準じている。

弥生時代後半から古墳時代にかけては、朝鮮半島からもたらされたと考えられる瓦質土器、赤褐色軟質土器、陶質土器等が存在するが、近年これらの土器は北九州、近畿を中心として各地で検出されており、その実体が徐々に解明しつつある。これらの土器の研究についてはいくつかの論考があるが、総合的な調査・研究は途についた状況にあるといえ、今後の進展を期さねばならない。

小稿では、まず「韓式系土器」についてのこれまでの研究成果、用語について整理し、次に、近畿地方を中心として、実際の土器、出土遺跡について粗くはあるが検討を加え、遺物・遺跡の性格とその後の影響、渡来系氏族との関係、文化交流についての見透しを述べ、今後の調査・研究の基礎とするものとした。また、小稿はあくまでも予察として述べるものであり、不十分な点については次回に期したいと考える。

1. これまでの研究史と用語概念

今日までの「韓式系土器」についての研究史は、天理市布留遺跡出土の初期須恵器、「韓式系土器」を報告された竹谷俊夫氏の報文に詳しいが¹⁾、ここではこれに準じて、これまでの研究成果と用語概念について触れてみたい。

まず「漢式土器」の名称についてであるが、この用語の始源については必ずしも明らかではない。1929年、浜田耕作氏は日本の古代土器を概説するなかで、「支那漢式黝色土器の系統に属する朝鮮風の土器が日本に傳ったのが、言う迄もなく祝部土器である。」としている²⁾。一方、1931年原田淑人氏は、中国・南北朝時代の陶器について論考し、中国・漢代の陶器を「漢代陶器」あるいは「漢式土器」として呼称している³⁾。このような見解を基にすれば、「漢式土器」とは中国の灰陶を源流とする漢代の硬質土器の総称として呼称されたと考えられる。

1953年、水野清一編『対馬』においても「漢式土器」という名称を用いている⁴⁾。この中で「漢式土器」は、「祝部ならぬ灰色土器の總稱であった。」としている。また、対馬朝

* 考古学研究室（昭和58年9月30日受理）

日山箱式石室群集墓出土の土器について触れ、格子叩き目文、縄蓆叩き目文等の特徴が、金海貝塚出土土器の系統をひくものとして、金海式土器として取り扱われるものとしている。さらに、この金海式土器が中国・漢代の灰色土器の影響を受けて成立したとすれば、「漢式土器」の名称は不当ではないとしながらも、ここでは金海式土器、祝部土器とその源流である「漢式土器」との区別の必要性を示していると言える。

このような状況の中で、1953年堅田直氏は、大阪府船橋遺跡、日下貝塚検出の縄蓆文、格子目文等を有する土器を一早く発表し、「漢式系土器」として命名した⁹⁾。「漢式系土器」の名称は、従来用いられていた「漢式土器」という名称を、中国・漢代の土器という枠ではなく、漢代灰色土器の系統を引く土器という概念でとらえたものであろう。この時点で紹介された土器の年代は、後の論文で5世紀代と訂正されるが、すでに大阪湾と朝鮮半島との交通、交渉の重要性を指摘している。

1960年、藤沢一夫氏は大阪府豊中市上津島遺跡出土の縄蓆文、格子目文を有する土器を報告し、「漢韓式系土器」と称している¹⁰⁾。この名称は中国、韓国の出土資料を考慮し、従前の「漢式土器」、「漢式系土器」の呼称をより具体的に表現するものであった。

1964年、堅田直氏は、日下遺跡の2次にわたる調査の成果に基づき、再び「漢式系土器」について論じている¹¹⁾。ここでは、日下貝塚出土土器の形態、焼成、叩き目文等を細かく検討し、金海式土器、対馬・朝日山箱式石室群集墓出土土器との対比から、所属時期を5世紀中頃と推定し、以前発表した弥生時代説を訂正した。また、ここで重要なことは「漢式系土器」の概念規定を行なっていることである。すなわち、単に「漢式土器」と称するものは、楽浪期、あるいは中国・漢代の土器に留めるべきであるとし、「漢式系土器」はその範囲を拡大し、「金海式を含めた朝鮮系の土器の総称」としている。

水野清一編『対馬』以前(1953年)においては、「漢式土器」は灰陶の系譜をひく漢代の灰色土器、あるいは灰色土器の影響下で成立した灰色硬質土器と解されていたものが、「漢式系土器」という名称によって、楽浪期、漢代以後に、主に朝鮮半島で製作された硬質・軟質の土器を含めて呼称されるようになったと言える。

その後しばらくの間、「漢式系土器」について論考される機会がなかったが、各地の発掘調査の件数の増加により、「漢式系土器」の実例が徐々に蓄積されてきたと言える。

次に、1979年、西谷正氏は日本における舶載土器を概説した中で、新たに「韓式土器・陶器」という名称を用いた¹²⁾。この名称の概念範囲は必ずしも明らかではないが、朝鮮半島出土土器の実体が解明するなかで、舶載品としてもち込まれた土器を取り扱ったものと考えられる。

このような中であって、畿内を中心とする「漢式系土器」の集成を試みたのは阿部嗣治氏であった。1980年、東大阪市出土の「漢式系土器」を紹介するなかで、「漢式系土器」とは、朝鮮半島からの渡来者、あるいは在地の人間が、日本で製作した土器(格子叩き目文、平行叩き目文、縄蓆文を有するもの)として規定し、舶載品は除くとしている¹³⁾。この場合、在地で製作された土器となると、陶質土器を除くことになるわけで、軟質系土器にのみ限定されたことになる。さらに、これらの土器は、初期須恵器との技法の共通性を認め、多くが初期須恵器、陶質土器と共存することから所属時期を5世紀中頃とした。阿部氏のこのような作業は、「漢式系土器」を総括的に取り扱う方向性として第一歩を踏み出したと言えよう。

1982年、堅田直氏は、帝塚山考古学研究所設立記念『日・韓古代文化の流れ』と題する講演会・シンポジウムの中で、従来、堅田氏が使用していた「漢式系土器」の名称を改

め、「韓式土器」あるいは「韓式系土器」と呼称した¹⁰⁾。このような改称の背景には、朝鮮半島における陶質土器、赤褐色軟質土器の様相の把握が内在したものと考えられる。この中で、大阪府日明山遺跡出土の瓦質土器・陶質土器（弥生時代中期）、古墳時代の陶質土器について舶載品の可能性を示し、その他の軟質系土器については在地で製作した可能性を説いている。また、これらの土器の年代について、ほとんどのものを5世紀代として渡来人との関係を解明する必要性を強調している。

つづいて、1982年、米田文孝氏は、大阪府国府遺跡、垂水南遺跡、五反島遺跡出土の土器を「漢韓系式土器」として紹介している¹¹⁾。この中で米田氏は、垂水南遺跡出土のものを5世紀初頭、国府遺跡出土のものを弥生後期から庄内式の段階に比定している。この時期決定の是非については、後の整理が進行する段階で解明されるであろう。

最後に、本節冒頭で紹介した竹谷俊夫氏の報告（1983年）について触れてみたい¹²⁾。まず用語概念については、「朝鮮から舶載されたものは韓式陶器または、韓式土器と呼び、日本で朝鮮の影響を強く受けて製作されたものについては、韓式系陶器、韓式系土師器と呼ぶ。」として、舶載品と日本で製作された土器、また硬質のものと軟質のものに区別している。このような分類は、朝鮮半島渡来系土器を考える上で実に明快なものと言える。しかし、今日まで使用されている須恵器、陶質土器という用語概念と重複することは避けられないと言えよう。次に同報告では、布留遺跡出土の陶質土器、「韓式系土師器」の検討、朝鮮半島出土の土器との対比を行ない、その故地を加耶地方に求めている。

以上、簡単ではあるが「韓式系土器」についてのこれまでの研究成果を整理した。この中で共通して言えることは、「漢式系土器」、「漢韓系式土器」、「韓式陶器・土器」、「韓式系陶器・土師器」といういずれの場合も、朝鮮半島の土器、あるいはその影響下で製作された土器を指しているということである。これらの用語の使用については、その時代的背景に起因することは充分考えられることであるが、その是非に関して論議することも必要であろう。つまり、「韓式土器」、「韓式系土器」と称する場合、弥生時代に属すると考えられる無文土器、瓦質土器、あるいは後出の陶質土器、赤褐色軟質土器等を総括して呼称するのか、あるいは阿部・竹谷氏の言うように特定の、限定された土器を指すのが重要である（竹谷氏の場合は、舶載品か日本産かで区別し、さらに両者にあって陶質か軟質かの差によって個々の名称を与えている）。

堅田氏、西谷氏の指す「韓式土器」、「韓式系土器」とは、いうまでもなく前者の朝鮮半島からの渡来系土器の総称であって、その中に瓦質土器、陶質土器、赤褐色軟質土器等を包括していると言える。このような方向性は、以前堅田氏が「漢式系土器」、藤沢氏が「漢韓系式土器」と呼んだ段階の意味内容を継承するものであり、その語源からも同様のことが言える。「韓式土器」、「韓式系土器」と称する場合の土器とは、瓦質・陶質・軟質の土器を含むものとして理解した方が、より妥当性をおびると考えられる。したがって、小稿では堅田氏、西谷氏の見解に従い、朝鮮半島からもたらされた土器、あるいはその影響下で渡来人及び在地の者が日本で製作した土器の総称として「韓式系土器」の名称を使用したい。また、一般に「韓式土器」と称して使用されている場合があるが、これも「韓式系土器」と同様の意味として理解しておきたい。

このように、朝鮮半島からの渡来系土器の総称として韓式系土器の名称を用うならば、次に竹谷氏が規定されるように、舶載か日本産か、陶質か軟質（土師器）かという点に関しての用語の問題が生じてくる。この点に関しては従来の見解に従い、朝鮮半島で製作された土器については、陶質土器（灰青色硬質土器と呼称される場合もある）、赤褐色軟質

土器、瓦質土器等で表わし、その影響下で日本で製作された土器については、軟質系土器と呼びたい。この軟質系土器の名称の是非に関しては、今後大いに論議される可能性を内示しているといえるが、小稿ではこれに従うものとする。以前に阿部氏、竹谷氏が定義された「漢式系土器」、「韓式系土師器」はこれに相当するものである。尚、陶質土器の系譜を引き日本で生産されたものは、当然のことながら須恵器と称されるものである。

次に、韓式系土器の所属時期について簡単に触れておこう。韓式系土器の概念からすれば、所属時期の幅というものはさほど問題にはならない。しかし、極端に言えば縄文時代から、奈良・平安時代、中世までのものを含めるかということになる。このような点に関しては、現在の段階では明確な判断は下しがたい状況にある。もともとの韓式系土器の概念と、それを包括する時間的問題とは有機的に作用しないからである。時代区分は、文化的・社会的要素を根拠として設定されるが、韓式系土器の概念は、この要素を表現する資料にはなるが、その区分された範囲のなかで定義付けすることは容易なことではない。したがって韓式系土器の時代区分としては今後の調査成果を踏まえ、その都度考えていかねばなるまい。しかし、これまでの成果によれば、弥生時代、古墳時代、加えて7世紀代の土器が中心といえ、特に古墳時代の出土量はかなりのものである。よって、小稿でもこれらの時代の土器を中心的に取り扱いたいと考える。

以上のように、本節では韓式系土器の研究略史、用語概念の整理を行ってきたが、この中で韓式系土器とは、朝鮮半島からもたらされた土器、あるいはその影響により日本で製作されたものとしたが、これらの土器は、広義の意味で渡来系遺物の中に含まれる渡来系土器、あるいは外来系土器と称する範疇に入るものである。

2. 韓式系土器, 出土遺跡の検討

韓式系土器を出土する遺跡は、すでに堅田直、阿部嗣治の両氏によって報告されているが、その数は大阪平野を中心としてかなりの量に達している。その概要は、第1表の通りであるが、出土遺構の明確なものは少なく、表面採集品、包含層出土、自然流路（河川）、溝内出土のものが多数を占め、井戸、土壌、住居址出土のものが僅かに報告されている。

この中で、今回は古墳出土の資料については取り上げていないが、大阪府野中古墳、和歌山県山崎山古墳、岐阜県遊塚古墳等からは、陶質土器の出土が明らかにされている。このような現象は、渡来系土器・文化を考える上で重要な資料となるのである。それではまず、韓式系土器出土の遺跡で代表的なものを取り上げて論を進めていきたい。

八尾南遺跡¹³⁾

八尾南遺跡では、井戸、土壌、包含層から初期須恵器、土師器とともに、陶質土器、多量の軟質系土器が出土している。軟質系土器の出土遺構としては、SE 1, 2, 5, 11, 14, 16, 21, 26, 27, SK 2, 28, 42, 62, 64, 69, 72があるという。器形としては甕（球形・長胴形）、壺、甌、鉢（丸底・平底）等である。甕は外面に平行叩き、内面にヘラ削りを施すもの、外面にハケ目、内面にヘラ削り、ハケ目あるいはナデを施すものがある。形態は体部が長胴のものと、球形でやや長胴ぎみに製作したものがあり、いずれも外上方へ開く短い口縁部を付けている。

壺として明確に判断出来るものは、SE 21出土のものである。短く直立した頸部からするどく外反する口縁部に、やや胴長の体部を付けた土器で、内外面ともハケ目を施す。

甌は、形態的にいくつかの分類が可能である。(1) 平底を有し、やや外上方へ直線的にのびる体部を有するもの。(2) 丸底の砲弾形の形態を呈するもの。(3) 直立気味にのびる

地域	遺跡名	所在地	出土場所				出土土器		器形						主な伴出遺物		時期	備考	
			住居址	溝	包含層	その他	瓦質	陶質	軟質	系土器				瓦質・陶質土器	須恵器	土師器			その他
										甕	鉢	甗	その他						
大阪府	大園遺跡	和泉市葛ノ葉町～高石市	///					///	///	///					///			5C中葉	
	七ノ坪遺跡	泉大津市豊中	///					///	///										
	豊中・古池(上池)遺跡	泉大津市豊中				河川		///	///						///				
	上津島遺跡	豊中市上津島				表採		///	///					甕					弥生時代?
	利倉西遺跡	豊中市利倉西			///			///	///						///				5C中葉
	垂水南遺跡	吹田市垂水町			///			///	///										
	五反田遺跡	吹田市五反田						///	///										
	郡家川西遺跡	高槻市川西町・郡家本町						///	///						///				5C中葉
	郡遺跡	茨木市郡上穂積・畑田町			///			///	///										
奈良県	大福遺跡	桜井市大福	///					///	///						///				5C後半
	纏向遺跡	桜井市太田町・辻町・東田	///					///	///						///				5C後半
	布留遺跡	天理市布留・三島				河川		///	///					高杯・器台	///				5C中葉～後半
	和爾・森本遺跡	天理市森本町・和爾町・栢町				井戸・河川		///	///					甕	///				5C中葉～後半
	発志院遺跡	大和郡山市発志院町						///	///						///				5C後半～6C
和歌山県	鳴神遺跡	和歌山市鳴神	///					///	///						///		土製支脚		5C後半
	大日山I遺跡	和歌山市鳴神				建物?		///	///						///				5C後半
	音浦遺跡	和歌山市鳴神						///	///					高杯	///				5C後半
	田屋遺跡	和歌山市田代地先	///					///	///					高杯	///				5C
	富安I遺跡	御坊市湯川町富安				住居址埋土		///	///						///				5C後半
兵庫県	吉田南遺跡	神戸市垂水区玉津町	///					///	///					甕	///				5C後半
	吉田第4地点遺跡	神戸市垂水区玉津町						///	///					甕	///				瓦質、焼成良好
	川島遺跡	揖保郡太子町						///	///						///				5C後半
	小山遺跡	姫路市延末小山				IV地点		///	///						///				弥生後期
	岸遺跡	加古川市西神吉町岸						///	///						///				弥生後期
	砂部遺跡	加古川市東神吉町	///					///	///						///				5C後半
滋賀県	南市東遺跡	高島郡安曇川町西万木	///					///	///					///					5C中葉～後半

その他不確認ではあるが大阪府はさみ山遺跡, 万崎池遺跡, 上田町遺跡, 菅田白鳥遺跡, 平野遺跡, 丹比紫宮遺跡, 一須賀遺跡等から韓式系土器の出土があるという。また, 愛知県, 埼玉県でも関連遺物の出土が伝えられている。

第1表 韓式系土器の出土遺跡

伴出遺物須恵器の欄で図としたものは、初期須恵器を含むものである。

地域	遺跡名	所在地	出土場所			出土土器		器形					主な伴出遺物		時期	備考	
			住居址	土溝	包含層	その他	瓦質	軟質	軟質系土器			瓦質・陶質土器	須恵器	土師器			その他
									甕	鉢	甌						
大阪府	茄子作遺跡	枚方市茄子作	■				■	■					■	■	■	5C	
	中野遺跡	四條畷市中野		■			■	■	■				■	■	■	5C後半	
	岡山南遺跡	四條畷市岡山		■			■	■	■				■	■	■	5C後半	
	芝ヶ丘遺跡	東大阪市中石切町		■		井戸	■	■	■				■	■	■	5C中葉	弥生後期
	縄手遺跡	東大阪市四條町・六万寺町		■			■	■	■				■	■	■	5C後半	
	西代遺跡	東大阪市横小路町				採集	■	■	■								
	池島遺跡	東大阪市池島町		■			■	■	■							5C	
	日下遺跡	東大阪市日下町		■			■	■	■			■				5C	
	鬼塚遺跡	東大阪市箱殿町・新町		■			■	■	■				■	■	■	5C後半	
	北島池遺跡	東大阪市北島池町		■			■	■	■								
	茨田安田遺跡	大阪市鶴見区茨田安田町				落ち込み	■	■	■							5C	
	難波宮下層遺跡	大阪市東区法門坂		■			■	■	■				■	■	■	5C中葉	
	長原遺跡	大阪市平野区长吉・長原		■		井戸	■	■	■			■	■	■	■	5C中葉	
	森小路遺跡	大阪市城東区古市大通		■			■	■	■				■	■	■	5C後半	
	八尾南遺跡	八尾市木の本町・若林町	■			井戸	■	■	■				■	■	■	5C中葉	紡錘車
	九宝寺北遺跡	東大阪市大蓮～八尾市神武町				自然流路	■	■	■				■	■	■	5C中葉	
	般橋遺跡	柏原市般橋		■		採集	■	■	■				■	■	■	5C中葉	
	大泉遺跡	柏原市大泉		■			■	■	■				■	■	■	5C	
	土師の里遺跡	藤井寺市土師の里	■				■	■	■							5C	
	国府遺跡	藤井寺市国府・惣社				表採	■	■	■								
高屋遺跡	羽曳野市高屋		■			■	■	■				■	■	■	5C中葉		
四ツ池遺跡	堺市浜寺船尾				河川	■	■	■				■	■	■	5C中葉		
船尾西遺跡	堺市浜寺船尾	■				■	■	■				■	■	■	5C後半		
土師遺跡	堺市百舌鳥・陵南・土師町	■				■	■	■				■	■	■	5C後半		
日明山遺跡	堺市昭和町～高石市羽衣				壺棺	■	■	■				■	■	■	弥生中期		

体部下半に対して、把手部から外上方へ開きぎみの体部をもつ長胴のものである。手法的には、外面に格子目・平行叩き目、ハケ目を施すもの、内面にヘラ削り、ナデ、ハケ目を施すものがある。

鉢にも形態的に2種類存在する。すなわち、平底を呈するものと丸底ぎみに製作したものである。平底のものは、短く外上方へ屈曲する口縁部と、やや内傾しながら底部に至る体部をもつものである。外面に平行叩き、縄蓆叩きを施すものと、ヘラ削りののちナデを施すものがある。内面はナデ、ヘラ削り調整するものがある。丸底の土器に関しては、短く外方向へ彎曲する口縁部にやや胴の張る体部を付けたものである。外面はナデ、ヘラ削りを施し、内面はナデ調整による。

このような軟質系土器の形態、手法は、従前の布留式土器の系譜を受け継ぐものではない。長胴の甕、短く外反する口縁部を付けたやや胴長の甕（小型・大型が存在すると考えられるが、報告者は小型の甕について広口壺としている）、壺、甌、鉢等は、八尾南遺跡では新たに出現する器種であり、渡来系土器の一端をのぞかせていると言える。

これら軟質系土器に伴うと考えられるものには、土師器、須恵器、製塩土器、紡錘車がある。須恵器を伴う遺構としては、SE 1, 2, 5, 16, 21, 27, SK 2, 7, 28, 42, 69があり、その他包含層内には多量に存在する。これらの須恵器は、直ちに韓式系土器、土師器と同時期にすることは出来ないまでも、いずれも初期須恵器の範疇に当たるものが大部分であり、共伴の可能性を示している。須恵器の所属時期で示すと、TK73型式に属すと考えられるものはSE 2, 27, SK 7, TK216型式は、SE 1, 5, 16, SK 2, 28である。したがって、韓式系土器、土師器（船橋0-II段階に属すると考えられる）の大半は、この初期須恵器の時期に属すると理解しておきたい。

次に、八尾南遺跡の遺構に触れてみたい。八尾南遺跡には、3つに分かれる微高地が存在するが、中心的な居住空間が営まれるのは中央微高地であると言う。この中央微高地には掘立柱建物、井戸、土壌等が存在し、東側微高地後背湿地には水田が確認されている。報告者は、初期須恵器の段階に属する遺構として、この掘立柱建物、井戸を含むとしている。このような見解に従うならば、この遺構、空間はまさしく当時の居住区域であることが判断出来るのである。

長原遺跡¹⁴⁾

長原遺跡は、八尾南遺跡西北部に所在する。かつては、旧大和川左岸に存在し、縄文時代晩期、弥生時代、古墳時代の遺構を検出している。韓式系土器は、長原16次調査、1979年調査分、及び1983年大阪市土地開発公社川辺市営住宅建設工事に伴う調査により多数検出されている。この中で良好な資料は1983年に行なわれたもので、井戸から数十個体分の韓式系土器を出土している。

この井戸出土の土器の主なもの、陶質土器（甌）、軟質系土器の甕（小型・長胴のもの）、甌、鉢（丸底が主であり平底風のもの丸底の形態を踏襲する）である。陶質土器は、たまねぎ形の体部によくしまった頸部をもつ甌である。黒青色を呈し、口縁端部・稜部はややシャープに作る。軟質系土器についてみると、甕は、短く外反する口縁部をもつ長胴のものがあり、外面にハケ目、内面の一部にヘラ削りを施すものがある。体部が球形かやや胴長の大型甕は、外面に平行叩き、内面にナデを施している。小型甕は大型甕と同様の形態を有し、外面ハケ目あるいはハケ目ののちにナデを施し、内面はナデ、ハケ目、部分的なヘラ削りを施すものがある。甌は平底のものを基本とするが、体部にふくらみをもたせたものもある。外面ハケ目、内面ハケ目あるいはナデ調整のものがある。鉢は、

基本的に丸底のものを主流とし、やや胴部のふくらむ体部に短く外反する口縁部を付けている。調整は外面ハケ目を基本とし、内面ハケ目、ナデ、部分的にヘラ削りするものがある。八尾南遺跡でみられたような平底鉢は出土していないが、平底風のもの丸底の体部の形態を踏襲し、体部下方と底部の境界は必ずしも明確ではない。平底鉢の例としては長原16次調査のものがある。

長原遺跡出土の韓式系土器の時期については確実におさえられるものはないが、井戸内より布留式の系譜を引く甕が共伴している。この甕は、船橋0-I~0-IIの様相を示している。また地点は異なるが、16次調査出土土器の中にはTK73・216型式含む土器が韓式系土器と共に出土しており、初期須恵器の段階の時期決定の可能性を示している。

遺構についてみると、井戸の存在は大きく、八尾南遺跡で窺われたように、井戸は建物の沿辺部に設けられている。そうすると、長原遺跡の場合も居住区域であることは当然考えられることであり、この周辺一帯を居住空間として理解しておきたい。

以上八尾南遺跡、長原遺跡について概観したが、このように井戸・住居址の示す居住空間、時期の決定が可能なものにはいくつかの遺跡がある。東大阪市芝ヶ丘遺跡では、井戸内より軟質系土器（甕、鉢）と共にTK73型式に属する初期須恵器を出土している¹⁵⁾。高石市大園遺跡では、5世紀中葉から後半代に属すると考えられる掘立柱建物、土壇、溝が検出され、土壇・溝内より韓式系土器、初期須恵器を出土している¹⁶⁾。同じように枚方市茄子作遺跡¹⁷⁾、滋賀県南市東遺跡¹⁸⁾、和歌山県鳴神遺跡¹⁹⁾からは、確実に住居址に伴って韓式系土器を出土している。また、和歌山県大日山I遺跡²⁰⁾では、溝内より韓式系土器を出土するが、隣接して掘立柱建物を検出し、両者の共存性を示唆している。そのほか、溝内出土の遺跡として四条畷市中野遺跡²¹⁾、東大阪市粗手遺跡²²⁾、兵庫県砂部遺跡²³⁾、和歌山市音浦遺跡²⁴⁾等があり、いずれの場合もこれらの遺跡が居住空間の可能性を示していることが知られるのである。

それでは、軟質系土器について考えてみよう。軟質系土器の主な器種は、甕、鉢、甗、それに鍋、壺が存在する。甕の器形には長胴のもの、体部は球形に近いがやや胴長のもの（大型と小型がある）があり、鉢にも平底のものと丸底のものがあつた。手法の主なものは、外面に叩き成形を行なうもの、ハケ目、ヘラ削りを施すものであるが、ハケ目ともヘラ削りとも異なる板状工具による調整（ハケ目と同様に施すと考えられるが、原体が異なるのであろう）を施すもの、ナデ調整を施すものが存在した。

このような軟質系土器は、従前の布留式土器の系譜の中でとらえることは不可能であることはすでに述べた。甕、鉢、甗、鍋の土器形態からも、外面に施される叩き成形においても同様であり、朝鮮半島に源流を求められるものである。

これら5世紀代における軟質系土器の出現は、その後の土器様式に大きな影響を与えたことは確かである。その最大のもの、甕と甗のセットであろう。長胴甕を基本として、甗を伴う例は多く存在するし、これにカマドを付け加えることによって1つのセットとして存在する。カマドには、住居内にとり付ける造り付けのものと、移動式のものがあるが、両者とも5世紀代より出現し、後代に受け継がれていくのである。このカマドの出現も、おそらく軟質系土器の出現が大きく影響していると考えたい²⁵⁾。

それでは次に、軟質系土器が舶載されたものか、日本で製作されたものかについて考えてみたい。この点に関しては決定的な根拠はない。東大阪市出土の軟質系土器は、胎土の検討から在地産であるという。もし仮に、軟質土器が舶載されたとすれば、その必然性が問われなければならない。日常の煮沸具としての土器が多量に出土することはむしろ不自

然であり、在地で、日本で製作した可能性が強いと考えておきたい。

軟質系土器の製作は、当初はその大半が渡来人により行なわれたと考えられよう。その根拠は、第1に叩き成形の特殊性である。布留式の系譜を引く土師器には、この技法は用いられないこと。また、この叩き成形が後の土師器に継続して存在しないことを考えるならば、これらの土器は、ある限られた時代の限られた人によって製作されたことになる。第2に、従来の土師器の製作技法が、軟質系土器に表われていないことである。軟質系土器の甕、鉢には、内外面に非常に粗いハケ目、ナデ、ヘラ削りを行なうが、この手法が土師器の手法と同一のものとは考え難いのである。また仮に、在地の人間が製作したとしても、それには渡来人との結び付きが濃厚に存在していたと考えられる。

このように、軟質系土器の多くが朝鮮半島からの渡来人によって製作されたとすれば、八尾南遺跡、長原遺跡等の在り方は、渡来人の居住地（周辺部も含む）、あるいはその影響を強く受けた集団の居住地とすることも可能である。出土遺物の中で、土師器、須恵器を共伴するものが存在する。このことは、渡来人と在地の人間との交流・接触を示している。軟質系土器を出土する遺跡の性格として、渡来人あるいは渡来人と強い結び付きをもつ集団の居住地としたが、この渡来人の係わり方には様々な形態が存在すると思われる。渡来人のみの居住地、渡来人の居住地と隣接して在地の居住地が存在する。在地の大集団の中に包括されて居住する等がある。このような形態は、まったくの推測にすぎないが、渡来人と在地集団の係りを解明する上で重要な問題と考えられる。

韓式系土器を出土する遺跡の分布は、かなりの密度で存在している。河内平野を中心として、その周辺部を囲むように存在する。特に河内平野、大阪湾岸地域、和歌山平野のあり方は特徴的である。今、この現象を解説する用意を持たないが、古墳時代において渡来人の流入・移民は偶発的なものではなく意図的に作用していると考えられる。たとえば、当時の中央権力と古代氏族の関係、氏族の職掌の関係等が考えられる。また、交通路としての水路、陸路と氏族のあり方も重要なポイントであろう。

遺跡の時期としては、各遺跡で微妙に異なるであろうが、大方5世紀代とすることが出来た。中には弥生時代に属するものもあるが、5世紀中葉を相前後して営まれたものが大半で、中には5世紀後半から6世紀にかけてまで存続するものもある。このような在り方は、今後の遺跡の整理・検討が進むなかで明らかにされるであろう。

3. 渡来人の役割

これまでに、韓式系土器（特に軟質系土器）を出土する遺跡は、渡来人の居住空間、あるいはその周辺部、渡来人と強い結びつきある集団の居住地、その周辺部の可能性が濃厚であると説いてきた。それでは、実際にこのような集団は、どのような性格をもち、どのような役割を果たしていたのかが問題となる。

河内平野の開拓の歴史は、通説によると4世紀後半から5世紀前半にかけて活発になるという。『古事記』・『日本書紀』の記載が、そのままこの時期に当該するかということの問題になるが、開拓の記事についてしばしば登場してくる。『崇神紀』六十二年条には依網池、苜坂池、反折池を造るとあり、『垂仁記』には、血沼池、狭山池、日下の高津池を造るとある。また、『仁徳紀』十一年条には、堀江の掘削と茨田堤を築いたとあり、『仁徳紀』十三年条には、和珥池、横野堤を造る、『仁徳紀』十四年条には、猪甘津に橋を渡すという記載のほかに、大道を造る、大溝を掘るということが記されている。

まず、堀江、茨田堤について触れてみたい。『日本書紀』仁徳天皇十一年条には次のよ

うに記されている。「冬十月、堀宮北之郊原、引南水以入西海。因以號其水曰堀江。又將防北河之滂、以築茨田堤。」と。また、『古事記』仁徳天皇条には「又倭秦人作茨田堤及茨田三宅、又作丸邇池、依網池、又掘難波之堀江而通海、又掘小橋江、又定墨江之津。」とある。『日本書紀』にはみえないが、『古事記』によると、茨田堤を築くにあたって秦人が従事したことがうかがわれる。

茨田堤の築造は、茨田氏を中心として、茨田勝、秦氏により行なわれたことはすでに明らかにされている。茨田勝、秦氏はいうまでもなく渡来系氏族であり、いずれも5世紀代には渡来していたと考えられる。両氏の居住地は、現在の段階では不明と言わざるをえないが、茨田勝は枚方市方面（旧茨田郡茨田郷）、秦氏は寝屋川市太秦地域に比定する見解もある。茨田勝、秦氏は渡来系氏族であるから、渡来当初の彼らが使用する土器は、軟質系土器を含むことも充分考えられる。しかし、両氏の居住地として推定出来る遺跡は、現在までのところ不明である。少し距離を隔てて、枚方市茄子作遺跡が存在している。

堀江、小橋江の所在地は、おおよその推定がなされている。堀江は、宮の北、南水を引いて西の海に至るわけであるから旧大和川の下流域に比定され、小橋江は、現在の大阪市天王寺区猪飼野、鶴橋東域に推定されている。これら堀江、小橋江の掘削工事は茨田堤、横野堤、さらには後に述べる大和川中流域の整備と一貫して行なわれたと考えられる。茨田堤の築造でみられた渡来人の従事が、堀江、小橋江の場合でも行なわれたかということについては検討を要するが、大土木工事に渡来人の従事・指導が行なわれるとする従来の見解は肯定出来よう。堀江の近辺には森小路遺跡、茨田安田遺跡が存在し、小橋江の北域には難波宮下層遺跡が存在する。これらの遺跡は、いずれも韓式系土器を出土し、渡来人の居住地としての可能性も存在する。もし仮に、土木工事に際して渡来人の従事が行なわれたとすれば、これらの集団の参加の可能性も無視は出来ないと考えられる。

次に、東大阪市内には韓式系土器を出土する遺跡が集中的に認められた。縄手遺跡、西代遺跡、池島遺跡、日下遺跡、北島池遺跡、鬼塚遺跡等である。これらの地域は、旧河内郡に属し、河内直、大戸氏等の渡来系氏族の居住した地域とされる。この地は古墳時代中期頃は、深野池に次ぐ湿地帯が多く存在したと考えられ、この開拓・開発と、恩智川の整備を中心的に進めたのがこの氏族であったことが説かれている²⁶⁾。

渡来系氏族（渡来人）が、土木工事に多大な役割を果たしたことはすでに述べた²⁷⁾。ここでは、土木工事と有機的な関係を示すと考えられる渡来人の居住地を掲げ、両者の共存の可能性を説いた。渡来人が担った重要な役割の1つとして土木工事と、その渡来人が居住した場所の推定を可能にしたのである。そのほかの土木工事として、血沼池、狭山池にみられる池の築造、大溝の造営等多々知られるが、これらの渡来人の従事、居住地については、今後の調査・分析結果を待って記することにした。

また、その他の分野でも渡来人の担った役割は大きい。『日本書紀』雄略七年条に載せる手末の才伎とは、手先を使う諸種の技術をもつ工人とされるが、その中には、陶部、鞍部、畫部、錦部、また、衣縫部等が存在している。このような工人は、いわゆる手工業生産に従事する者であり、特殊な技術を備えていると言える。このような生産部門にあっても、その居住地、生産地とともに古代氏族との係りを求明する必要がある。

つづいて、渡来系氏族として有名なものに、王仁を同一祖とする西文、船、津、白猪、馬の各氏がいる。主な職掌として、文筆、港津、船、陸路（馬）の管理を中心とする。彼らは、壬申の乱以後、急に勢力を増すと考えられているが、5世紀代にすでに来朝していた。本拠地は、現在の藤井寺市から羽曳野市古市にかけてである。羽曳野高屋遺跡では、

少量ながら軟質系土器の甕片を出土しており²⁸⁾、5世紀代における王仁との関連性を示す可能性もある。また、古市周辺に居住する渡来系氏族に、古市村主(王仁の一家)、白鳥村主がみえる(『景行紀』四十年条)。

その他、渡来系氏族と考えられるものに、飛鳥戸造、大泉史等多く存在するが、実際にこれらの氏族が5世紀代まで溯るか否かについては、筆者は考定する才量がない。しかし韓式系土器を出土する遺跡の検討から、渡来人の居住地を定め、文献にあらわれる氏族との関連を考えることは重要であり、今後進展させていかねばなるまい²⁹⁾。

4. 今後の課題と展望

小稿では、韓式系土器と出土遺跡の検討から、渡来氏族の関係について述べた。渡来系氏族の役割の中で、まず第1に堤、堀江等を含む土木工事があった。古墳時代の河内平野は、旧大和川の沖積作用がかなり進行したと言っても、河川の氾濫、低湿地帯の存在はかりのものであったと考えられる。このような状況にあって、河川の整備、灌漑、開拓は、農耕、治水といった側面だけではなく、広く勢力基盤の拡大、交通路(水路)の確保のといった政治・社会面での意義も重要と考えられ³⁰⁾、当時の中央権力・古代氏族が推進した理由もここにある。このような現象のなかで、渡来人のもつ技術が重要な役割を果たしたと言えるのである。

手工業生産における渡来人の役割は、前にも触れた。須恵器、鉄製品、織物等の生産部門における役割である。5世紀代における須恵器生産の開始、鉄製品の量産化と鉄鋤先、馬具の出現、甲冑にみられる鋳留技法の出現等、渡来人による技術指導の結果と考えられる。須恵器生産は、初期の段階において一須賀古窯址、陶邑古窯址群TK73号窯に代表されるようにごく限られた窯を築造している。この生産地が遺跡の上で把握出来ることは、渡来人と在地氏族と考える上で興味深い。窯の成立は、立地、土壌、燃料等に強く制約される面もあるが、須恵器工人(渡来人)を掌握・支持し、生産を促進させた要因も重要である。つまり、渡来人と中央権力、氏族の関係が想定出来るのである。一須賀古窯址が、単独で石川中流域に存在することは特異であり、渡来人(須恵器工人)と古代氏族の解明がまたれる。陶邑古窯址群も、生産遺跡の在り方と、居住地の検討を加えることにより、同様の指摘がなされると考えたい。

このように、古墳時代にあって渡来人による技術・文化の導入は、当時の中央権力、氏族にとって重要な意味をもっていたということはいままでのない。渡来人の果たした役割は、学芸、政務、外交、手工業、軍事、土木等あらゆる側面でとらえることが出来るが、その現象を総括的に捉えらるる必要があるのである³¹⁾。特に、遺跡、遺物にみられる現象の中で、手工業生産の部門については期を改めて行なうことにしたい。

次に、年代について触れると、韓式系土器の時期は多くの場合5世紀代であり、中でも中葉前後から後半にかけて集中的にみられた。弥生時代に属するものは、高石市日明山遺跡等いくつかみられるが、その数は僅少である。また、6世紀代のものについては、その把握が困難である。このようにしてみると、渡来人の流入・移民、文化の流入は、各時期に普遍的に認められるのではなく、いくつかの波が存在するのである³²⁾。とりわけ、5世紀代における現象は、その集中する時期であろう。この時期は、前に触れた須恵器生産の開始、鉄器の量産化、技術革新、治水・開拓工事の活発化が共通して認められる時期であり、渡来文化の最大の流入期として理解出来る。

渡来系遺物には、朝鮮半島に源流を求めるもの、朝鮮半島の中でも楽浪の地に比定出来

るもの、さらに中国大陸に直接求められるものが存在するが、渡来時期、系譜の違いは、政治・社会史を考える上で特に留意される。

5世紀代の韓式系土器が、大阪府、和歌山、九州北部で多量に出土することは、当地域が朝鮮半島との交渉に重要な関心をおいていたということのほかに、この地域が交渉・接触する機会を得ていたこと、また交渉を行ないえる強力な勢力を保持していたからにほかならない。大阪平野・大和盆地は、当時の中央権力を中心として各氏族が占拠し、対外交渉に積極的に取り組んだと考えられる。和歌山平野においては、海上交通の職を担った紀氏が存在し、渡来人、渡来系遺物と接触する機会を頻繁に有し、一部において掌握していたと考えられる。九州北部は、地理的要素が最大の要因であるが、渡来系遺物の受入に直接的、積極的に対応したとも考えられる。また、そのほか周辺部の地域、吉備地方についての考察も必要である。

以上、いくつかの項目について述べてきた。非常に雑然とした不十分の内容であるが、今回は一応の予察として報じた次第であることをおことわりしておきたい。最後に、今後の課題を整理して終りとしたい。(1) 朝鮮半島における韓式系土器の系譜、出自の確認、韓式系土器の及ぼすその後の影響を考える。(2) 韓式系土器出土遺跡の分析と検討を行ない、古代氏族との関係を考える。(3) 各時期における渡来系土器の位置付けと、渡来人の役割について考える。(4) 韓式系土器の分布と、その性格について検討する。(5) 古墳時代社会にあって、氏族等を含めた社会構造の復原、等があげられるのである。

註

- 1) 竹谷俊夫『布留遺跡出土の初期須恵器と韓式系土器』(『考古学調査研究中間報告』8 埋蔵文化財天理教調査団) 1983年。
- 2) 浜田耕作「日本の古代土器」(『史前学雑誌』第1巻第4号) 1929年。
- 3) 原田淑人「支那南北朝の陶器に就いて」(『考古学雑誌』第21巻第1号) 1931年。
- 4) 水野清一編『対馬』(『東亜考古学叢刊』乙種第6冊 東亜考古学会) 1953年。
- 5) 堅田直「畿内出土の漢式系土器について」(『日本考古学協会第29回総会研究発表要旨 日本考古学協会』1953年。
- 6) 藤沢一夫「上津島弥生式遺跡出土の漢韓式土器」(『豊中市史』史料編第1巻) 1960年。
- 7) 堅田直「枚岡市日下遺跡出土の漢式系土器について」(『大阪私立短期大学協議会研究報告集』) 1964年。
- 8) 西谷正「日本における韓式土器・陶器」(『世界陶磁全集』17 韓国古代 小学館) 1979年。
- 9) 阿部嗣治「東大阪市出土の漢式系土器について」(『東大阪市遺跡保護調査会年報』1979年度 東大阪市遺跡保護調査会) 1980年。
- 10) 堅田直「韓半島伝来の印目文土器(韓式系土器)について」(『日・韓古代文化の流れ』帝塚山考古学研究所) 1982年。
- 11) 米田文孝「所謂漢韓式土器の一例」(『千陵』関西大学博物館学課程創設20周年記念特集 関西大学) 1982年。
- 12) 竹谷俊夫 前掲註(1)。
- 13) 米田敏幸ほか『八尾南遺跡』一大阪市高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書一 八尾南遺跡調査会 1981年。
- 14) 山本明彦「河内・長原遺跡の調査」(『盾列』第6号 奈良大学考古学研究会) 1980年、大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会『大阪市土地開発公社川辺市管住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査の現地説明会資料』1983年。尚、川辺市管住宅建設工事に伴う調査出土の韓式系土器は、(財)大阪市文化財協会田中清美氏の御好意により実見させていただいた。また、長原16次調査の土器に

関しては、森毅氏の御配慮により実見させていただいた。

- 15) 下村晴文「芝ヶ丘遺跡発掘調査概報」(『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集』1980年度 東大阪市遺跡保護調査会) 1981年, 阿部嗣治 前掲註(9)。
- 16) 広瀬和雄ほか『大園遺跡発掘調査概要』VI 大阪府教育委員会 1981年。
- 17) (財)枚方市文化財研究調査会宇治田和生氏の御好意により実見させていただいた。
- 18) 中江彰『南市東遺跡発掘調査概報』安曇川町教育委員会 1979年。
- 19) 吉田宣夫ほか『鳴神地区遺跡発掘調査概報』I・II 和歌山県教育委員会・社団法人和歌山県文化財研究会 1979年。
- 20) 小賀直樹ほか「大日山I遺跡」(『近畿自動車道と歌山線埋蔵文化財調査報告』『和歌山県文化財学術調査報告書』5 和歌山県教育委員会・日本道路公団大阪支社) 1972年。
- 21) 四条巖市教育委員会野島稔氏の御好意により実見させていただいた。
- 22) 阿部嗣治 前掲註(9)。また後の調査においても出土していると言う。阿部嗣治, 中西克宏両氏の御教示による。
- 23) 上田哲也ほか『加古川市砂部遺跡』加古川市教育委員会 1978年。
- 24) 藤丸昭八郎「音浦遺跡」(『近畿自動車道と歌山線埋蔵文化財調査報告』『和歌山県文化財学術調査報告書』5 和歌山県教育委員会・日本道路公団大阪支社) 1972年。
- 25) 造り付けのカマドの例としては、前出の滋賀県南市東遺跡の住居址があり、軟質系土器、陶質土器、初期須恵器を伴出している。須恵器の年代は、TK73・216型式に属し、カマドの例としては、最古に属する(近年、堺市四ツ池遺跡では、止内期に溯る可能性のあるカマド例を発表されたが、その判断は今後の調査成果を待ちたい)。このような韓式系土器とカマドの共存は、両者が5世紀における一時期の所産であり、朝鮮半島からの人間の渡来、文化の受入と直接的に関係していると考えられる。尚、5世紀後半代におけるカマドの出現とその影響について述べた論考に次のものがある。林博通「カマド出現に関する二・三の問題」(『水と土の考古学』小江慶雄先生還歴記念論集 小江先生還歴記念論集刊行会) 1973年。また、関東地方におけるカマドと甕、甗の出現とその後の影響について述べたものに、中村倉次「大形甕一埼玉県を中心として」(『土曜考古』第5号) 1982年、がある。
- 26) 角林文雄「雉波の堀江・茨田堤・恩智川」(『日本書紀研究』第10冊 塙書房) 1977年。
- 27) このような意義に関しての論考は多くあるが、この渡来人を移住民集団と定義し、開拓にみられる役割を説くものがある。文史衛「朝鮮三国の移住民集団による畿内地方の開拓について」(『歴史学研究』第374号) 1971年。また、本文で記載した他に、池・堤の築造に関して渡来系氏族が大きくかかわっていたとする史料がある。
『応神紀』七年条, 時命武内宿禰, 領諸韓人等作池, 因以, 名池号韓人池,
『応神記』亦, 新羅人參渡来, 是以, 建内宿禰命引率, 為役之堤池而, 作百濟池。
- 28) 畑本政美「高屋遺跡」(『古市遺跡群』III『羽曳野市埋蔵文化財調査報告書』7 羽曳野市教育委員会) 1981年。
- 29) たとえば土師氏の木掘地周辺には、土師の里遺跡、国府遺跡が所在し、大泉氏については大泉遺跡が所在する。
- 30) 大和川の整備に関して物部氏が力を注いだことについては、このような側面からの論考が行なわれている。亀井輝一郎「大和川と物部氏」(『日本書紀研究』第9冊 塙書房) 1976年。
- 31) これらの役割については、直接遺跡、遺物に反影されるものと、反影されないものが存在し、その総合的把握を困難にしていると言える。
- 32) 註(9)で触れたように、遺跡、遺物に直接反影されないものについての考察も必要であろう。

〔追記〕本文中で使用している初期須恵器とは、拙稿「西日本の初期須恵器—三ツ城古墳を中心として—」(『奈良大学紀要』第9号1980年)で示した概念に従っていることをおことわりしておきたい。また、本稿提出後、福岡澄男氏は「近畿地方における三国時代朝鮮系土器の流入とその影響」

と題して、渡来系土器について発表された（『第1回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』1983年10月）。本稿で概観した土師器の組成の変化と、渡来系氏族との関係について論じられていることを記しておきたい。

Summary

This is a preliminary report on Korean peninsula style pottery, called Kanshikikei-Doki (韓式系土器), during the 5th and 6th centuries in Japan. First, the author reviews a short history of the study, and defines some technical terms. Second, several archaeological sites with the potteries are showed in detail. Based on these descriptions, roles of the immigrants from the Korean peninsula and relationships between them and indigeneous peoples of Japan are discussed finally. The results of the research and the discussions are as follows;

- (1) Most of the potteries are found in Osaka, Wakakayama, and Fukuoka prefecture.
- (2) The soft type among the potteries influenced the traditional potteries (specially kitchen range, steamer, and boiling jar), Hajiki of Japan.
- (3) The sites with Korean style potteries are supposed to be residence of immigrants from the Korean peninsula.
- (4) They made special roles in construction works, manufacturing and so on.
- (5) There are periodically some different sources in the peninsula.
- (6) The fact that many potteries were concentratedly imported from the peninsula during 5th century reflects a strong social relationships between Korea and Japan.
- (7) The author will try to make up a perfect list and distribution map, then discuss the relationships between the immigrants and the indigeneous peoples in the future.